【ｐ46～ｐ51】　愛のひと　―野口ゆか―

１　資料活用にあたって

○　本資料では、野口ゆかが保育園を創設した業績だけではなく、その根底となる ゆか が幼少期から持ち続けた思いやりの心に目を向けさせる。

○　中学年の内容項目Ｂ（６）では、相手の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるよう指導することが求められている。

２　資料の読み方のポイント

○　主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（野口ゆか）の生き方を貫くものを考える資料であり、ゆかの立場で場面を捉えていく。（子どもが「ゆか」になって考えられるように発問を工夫する。）

○　ゆかの生き方を貫いたものは、相手の立場に立って親切にしたいという思いやりの心であり、子どもの頃から困っている人を見るとじっとしておれないなど、ゆかが幼少期から持ち続けた心情であった。

○　ゆかに愛情を注ぎ思いやりの心を育んだ父の「子どもはたからだ」という言葉は、人生の二度の転機でゆかの頭に去来し、進むべき道を決意させる。一度目は十九歳の時に両親を亡くして、悲しみ、さみしさ、絶望の中にあった時に、子どもの力になろうと自分のすべきことを見つけるきっかけとなり、二度目は、豊かな家庭の子どものための保育園しかないことに心を痛めていた時に、恵まれない家庭の子どもが通える保育園をつくり、自分の生涯を捧げる決心をするきっかけとなった。

３　読み物資料の素材について

【参考文献等】

・　『黎明の女たち』島京子編　神戸新聞出版センター、１９８６年
・　『学問・教育の道ひらく』近代の女性史９、集英社、監修　円地文子、１９８１年
・　『郷土百人の先覚者』兵庫県教育委員会、１９６７年

○　野口ゆかについて

・　ゆかは、慶応２年（１８６６年）、姫路で六人兄弟の長女として生まれ、高潔で学問好きなところを父から、心やさしく明るいところを母から受けつぎ、すくすくと育っていった。
・　小さい時から、向学心があったゆかは、父親が写本してくれた漢学や英語の本で勉強していた。また、困っている人をみると、そのままにしておくことができない子どもだった。
・　東京女子師範学校時代に心の支えであった父母が続けて死去し、人生で最大の孤独と絶望感を味わった。その時に、子どもの力になろうという自分の夢を見つけ、絶望から抜け出す。
・　ゆかは、恵まれない家庭の子どもが満足な保育をうけられないで放任されていることを見過ごすことができず、友達であった森島美根（もりしまみね）、徳永恕（とくながゆき）と協力して日本最初の幼稚園（二葉幼稚園）を設立した。ゆかは、幼児教育に一生をささげ、東洋のフレーベル※になろうとしたのである。
・　ゆかは、八十五歳の長寿を全うし、多磨墓地に埋葬され「二葉保育園の母　野口ゆか･･･ここにねむる」と刻まれた自然石の墓がある。姫路にも分骨されている。

※フレーベル：１７８２年～１８５２年、ドイツの教育者。幼児教育の祖であり、「幼稚園(Kindergarten)」という言葉を初めて用いた。

4　展開の具体例

愛のひと　―野口ゆか―

・主　題　名　・進んで親切にしよう　B（6）

・資料の概要　・ゆかは、小さい頃から困っている人を見るとほっておくことができない子であった。困っている人がいれば、自分ができることを考えて行動していた。両親の死後、父の言葉を思い出し、子どもたちの力になろうと決意したゆかは、教育を受けることができなくて困っている子どものための保育園を作り、幼児教育に一生をささげる。

・ね　ら　い　・恵まれない子どもたちの保育園を創設する主人公を通して、困っている人には進んで親切にしようとする道徳的実践意欲を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導入	・学習する道徳的価値に関心を持つ。	友達に親切にしてもらって、うれしく思ったことはありますか。
展開	・資料の範読を聞きながら黙読する。 ・困っている人を見たときの主人公の気持ちを考える。	子どもの頃、近くに住むおばあさんや隣の家のお手伝いさんが困っているのを見た時、ゆかはどんな気持ちだったのでしょう。 ・きっとつらい思いをしているのでしょうね。 ・何かわたしにできることはないかな。 ・困っている人たちを放っておけない。
	・めぐまれない子どもたちを目にして、お父さんの言葉がよみがえった時の主人公の気持ちを考える。	「子どもは宝だ。」と言ったお父さんの言葉がよみがえった時、ゆかはどんなことを考えたのでしょう。 ・この子たちのために、私にできることは、どんなことだろう。 ・わたしも、お父さんがわたしのためにしてくれたように子どもたちのためになろう。 ・困っている子どもたちのための保育園をつくろう。
	・笑顔で子どもたちの輪の中に入る主人公の思いを考える。	笑顔で子どもの輪の中に入っていくゆかは、どんな気持ちなのでしょう。 ・子どもたちの笑顔がうれしい。 ・子どもたちの笑顔は、わたしの宝物だ。 ・この子どもたちがいつも笑顔でいられるように、これからもがんばろう。
終末	・自分のことを振り返る。	副読本Ｐ５１を読みましょう。

相手の困っていることを想像することによって相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする主人公の姿をおさえる。

再び思い出したお父さんの言葉がきっかけとなり、主人公に、相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする意識が高まっていることをおさえる。

笑顔で子どもの輪の中に入る主人公が、「これからも困っている子どもたちのために力を尽くそう」という実践意欲を強めていることをおさえる。